

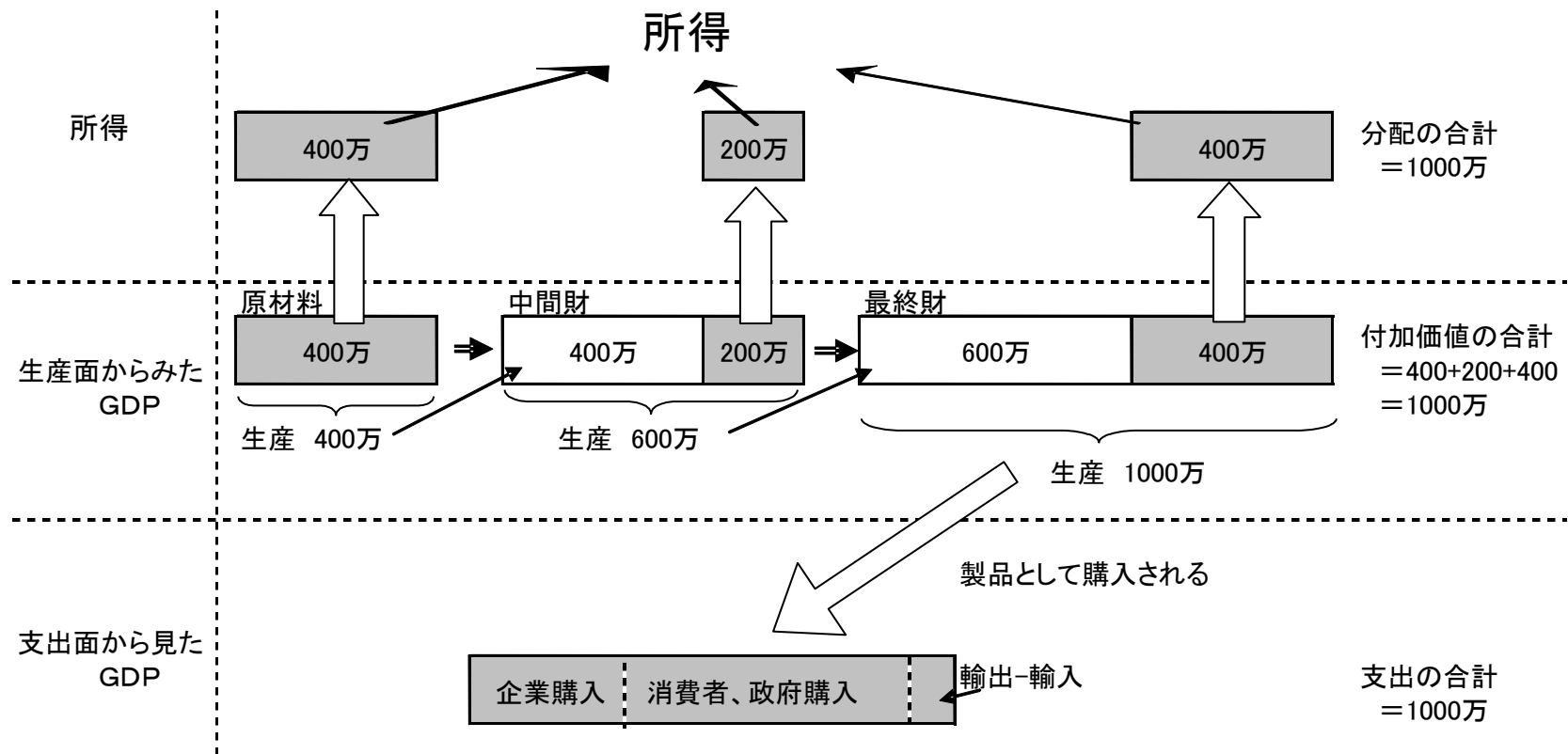
マクロ経済学A 復習と練習問題

2018年6月19、26日

7月3日

第6～9回

生産面からのGDPは中段： 付加価値の合計



日本経済新聞18年3月8日付 支出項目ごとに内訳が出る

10～12月期の G D P改定値の内訳		
〔季節調整値、前期比の増減率%、▲は減少、民間在庫はG D P伸び率にどれだけ影響したかを示す寄与度ポイント〕		
	速報値	改定値
G D P (年率換算)	0.1 0.5	0.4 1.6
個人消費	0.5	0.5
住宅投資	▲2.7	▲2.6
設備投資	0.7	1.0
民間在庫	▲0.1	0.1
政府消費	▲0.1	▲0.0
公共投資	▲0.5	▲0.2
輸出入	2.4 2.9	2.4 2.9
名目G D P (年率換算)	▲0.0 ▲0.1	0.3 1.1

政府支出の取り扱い

- マクロモデルでは、政府がモノ・サービスを買うのも(最終)支出になる
- その後の段階で加工を加えたりしない＝政府は消費者と同じような扱いとなる
- 政府は、税金を家計からとり、政府支出を行う主体である。
- 後で出てくるが、景気が悪い時、政府は政府支出を増やすことで、GDPを大きくすることができる。
- 政府支出は、政府消費と公共投資で構成されている。

45度線マクロ・モデルの前提

- GDP(景気の変動)は、総需要の大きさで決まる。
- 企業は、自分の生産する財・サービスが思ったように売れない場合、少なくとも短期的には数量調整する。
 - 海岸のアイスクリーム
 - 注文生産

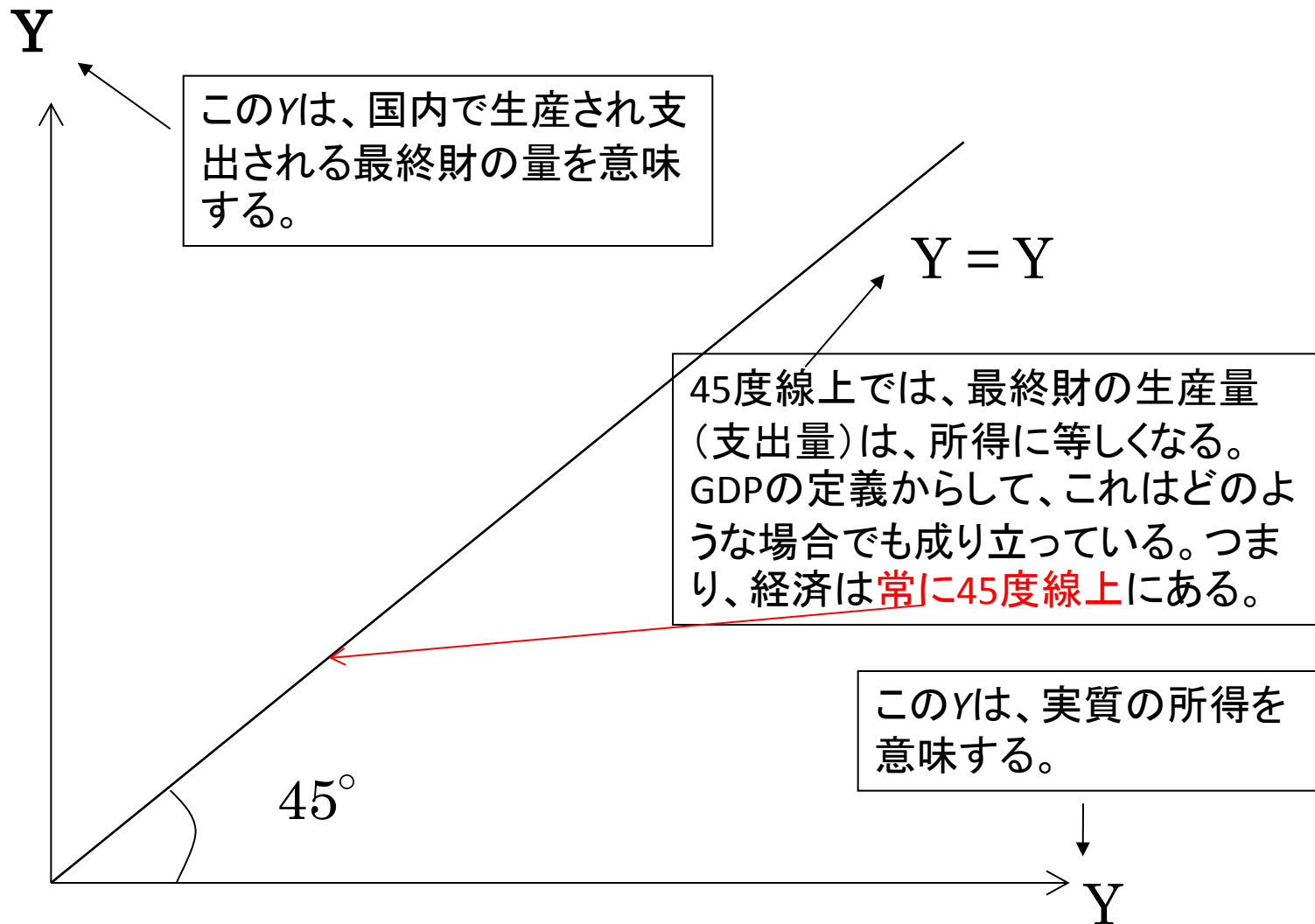
45度線マクロ・モデルの構造

- モデルの方程式は、

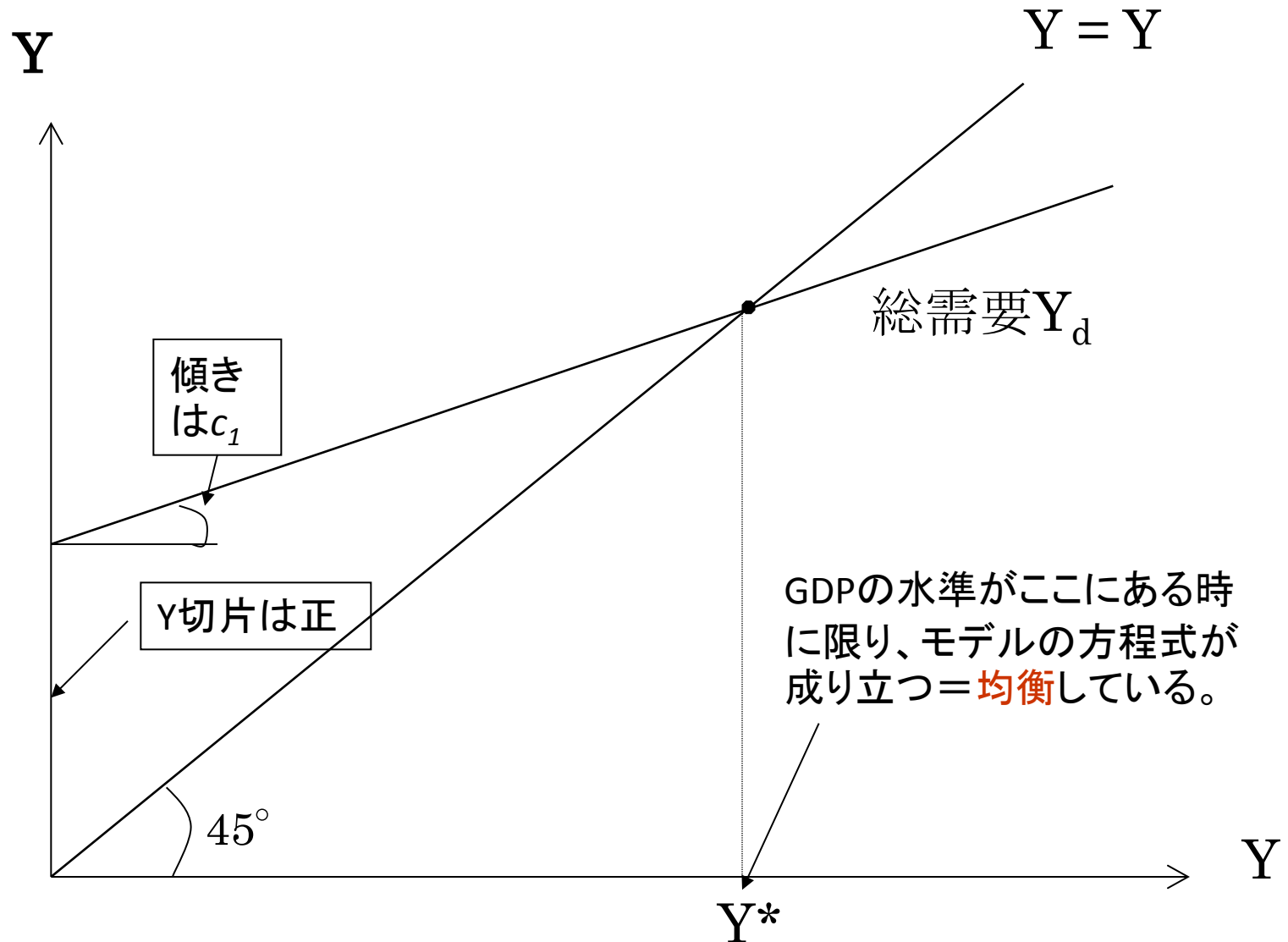
$$Y = c_0 + c_1(Y - T) + I + G$$

- 左辺(最終財生産量)が右辺(総需要)と釣り合うように、GDPが決まるというもの。
- 総需要は、消費、投資、政府支出の和である。

45度線図



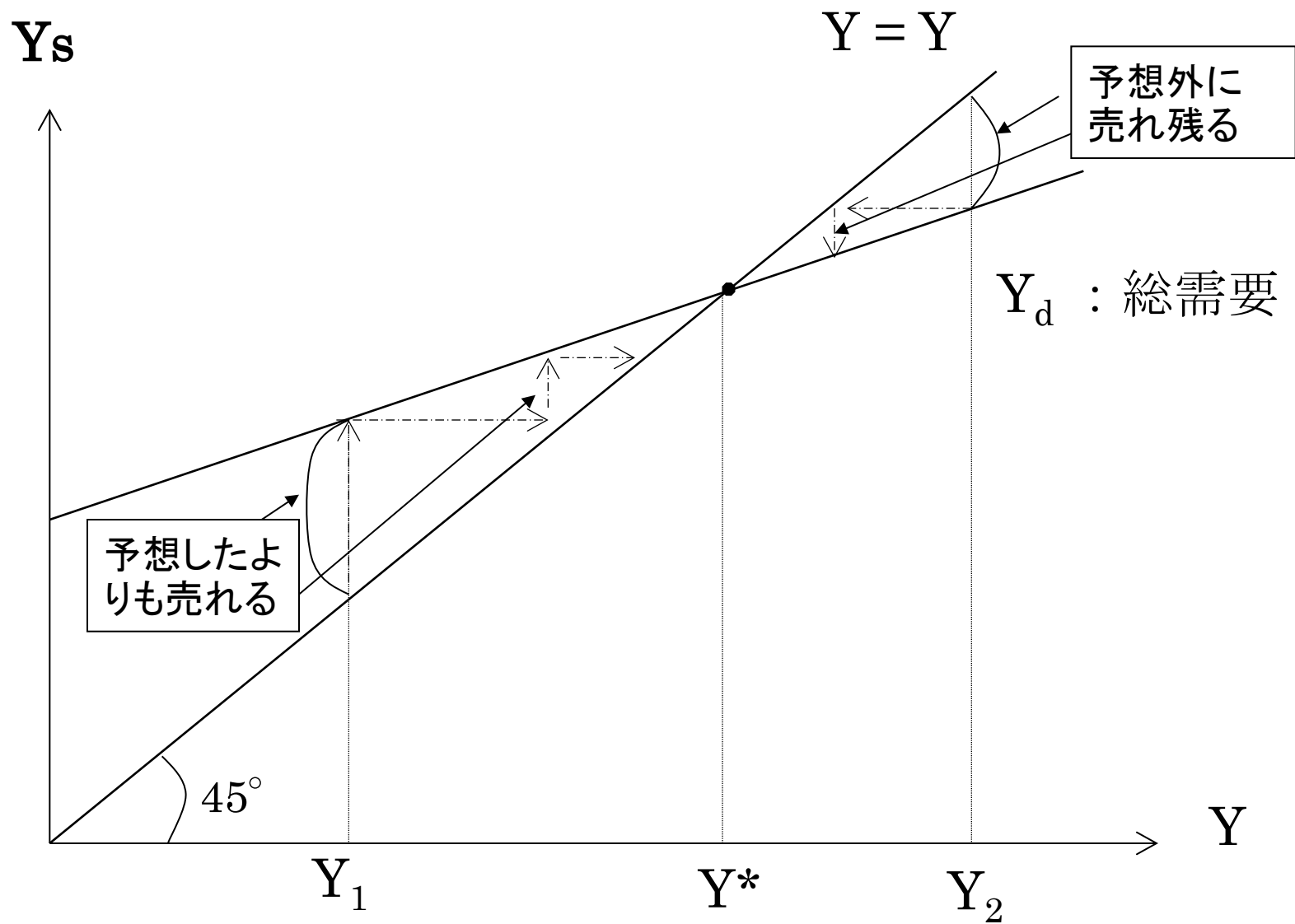
総需要と45度線図



「均衡している」の意味

- 均衡点のGDPが実現している場合、企業が生産した量が、ちょうど全部「需要されている」。現実には、ちょうど総需要の量だけ、売れる（消費、投資、政府支出）。
- GDPが均衡水準よりも小さかったら何が起こるか？大きかったらどうか？→ 数量調整が始まる。

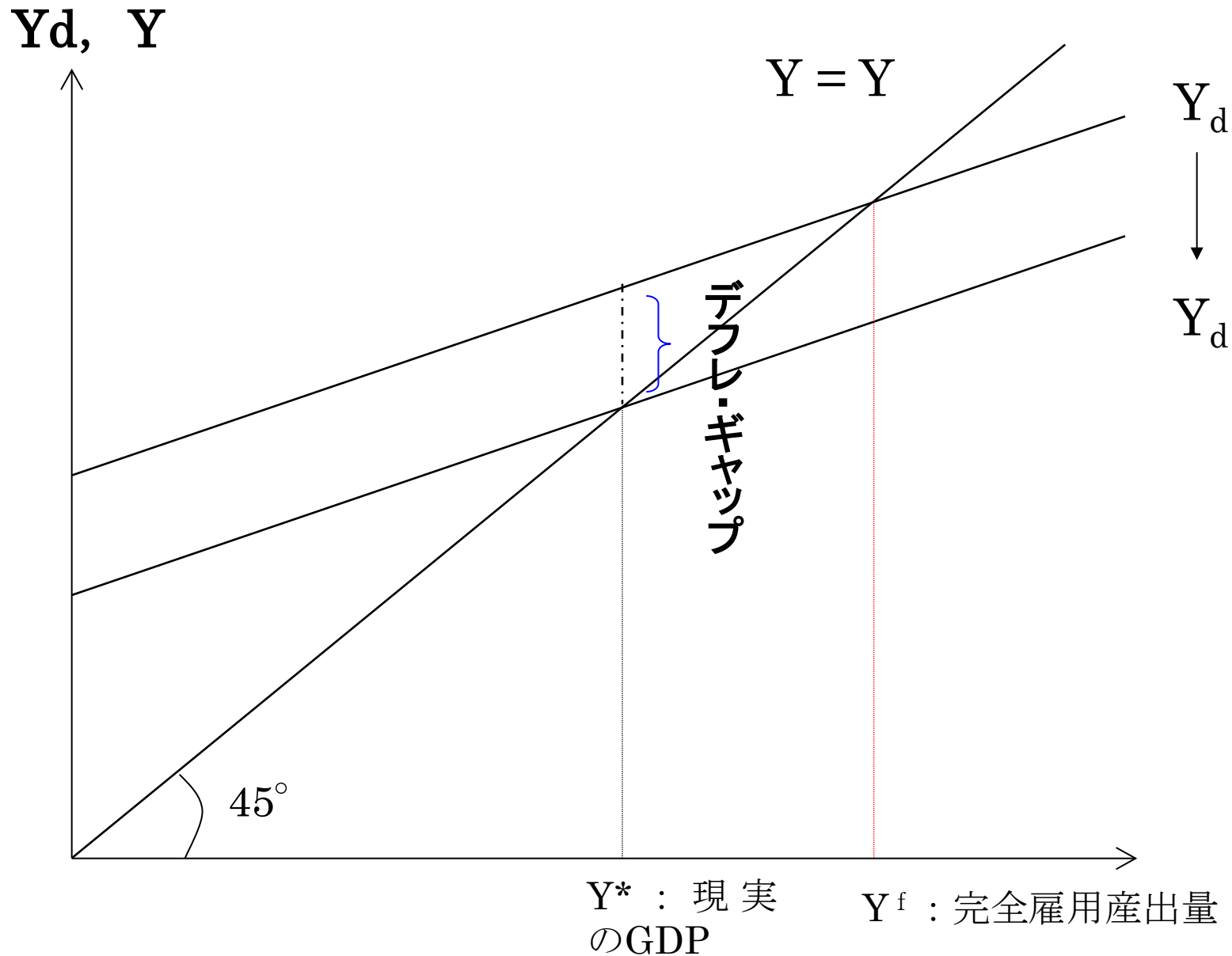
数量調整による生産の変動は増幅する



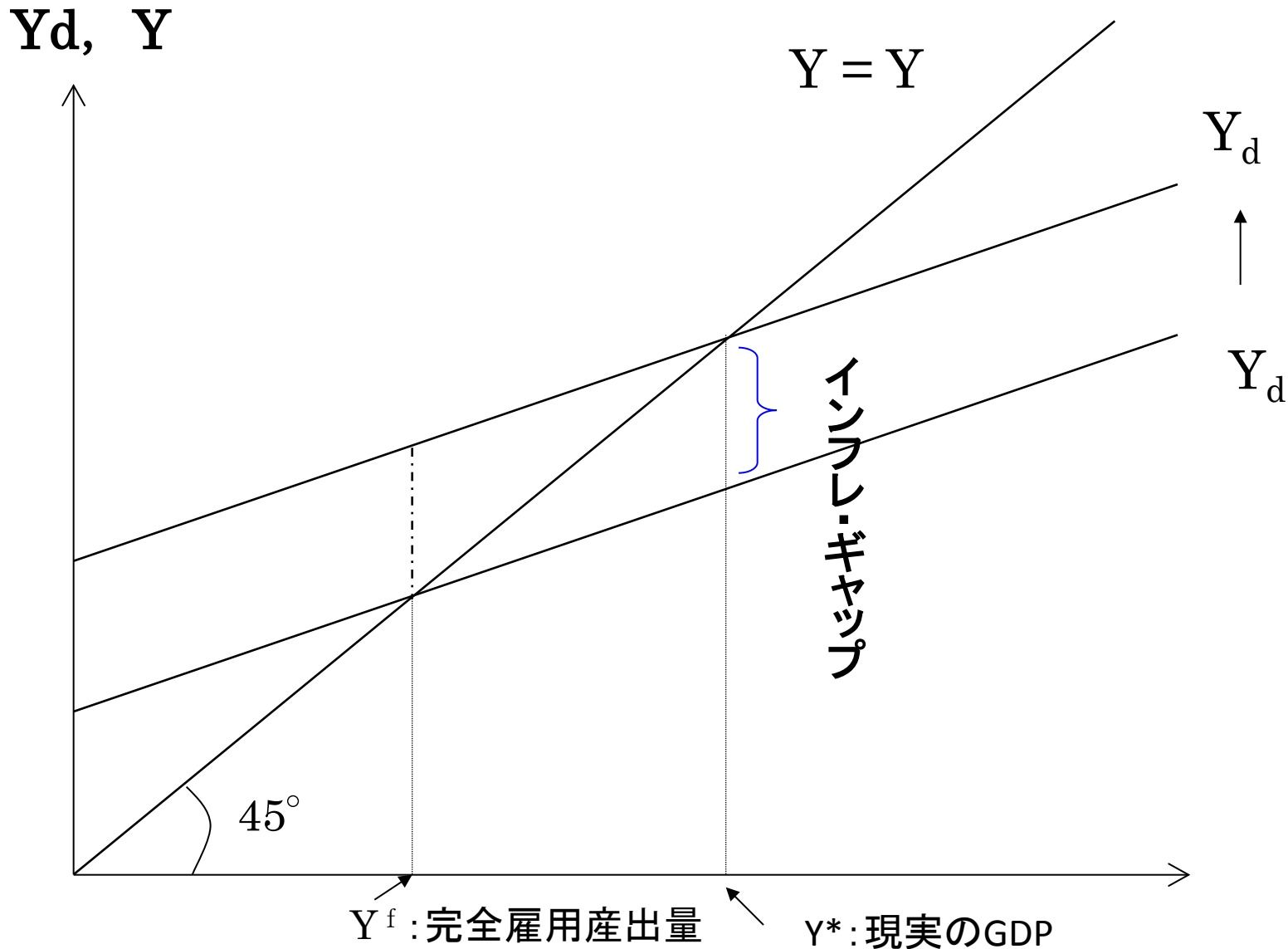
Y^* が理想水準とは限らない

- 短期マクロモデルの均衡値は Y^* 。
- ただし、生産量が Y^* でも不況や景気過熱のことがある。
- 理想的な水準の Y を、完全雇用産出量あるいは潜在GDPとよぶ。
- Y が理想的な水準であれば、経済は、完全雇用となる。
- 完全雇用は、労働力や資本が「無理なく、全部使用されている」

不況は総需要の減退から起きる。完全雇用産出量よりもGDPが小さい状態が続くと失業が発生する。



景気の過熱は総需要が大きくなりすぎることから発生する。
この状態が続くと、物価上昇（インフレ）が生じる。



復習問題

1. 総需要が総生産を下回ると生産は増えるか、減るか
2. マクロ経済の均衡式(下記)をもとに、均衡するGDPを求めよ。

$$Y = c_0 + c_1(Y - T) + I + G$$

3. $C = 100 + 0.5*(Y - T)$, $I = 100$, $G = 90$, $T = 80$ のとき、 Y の値を求めよ(これが、均衡するGDPである)。